

マネジメント思考型ルーブリックを用いた 自己有用感高度化計画の推進

中原 育代^{*1}・佐々木 司

Promoting the Self-Efficacy of Students through the Management-Based Rubrics

NAKAHARA Ikuyo^{*1}, SASAKI Tsukasa

(Received August 6, 2021)

キーワード：自己有用感、学校改善、ルーブリック

はじめに

本論文は、「マネジメント思考型ルーブリック」を用いた自己有用感高度化研究について、その概要を述べるとともに成果と課題に言及するものである。「マネジメント思考型ルーブリック」は、筆者の一人、中原が山口大学教職大学院（教職実践高度化専攻）在学中に考案したもので、平成31年度からの2年間に渡り、防府市立右田中学校において導入を進め、それに基づく自己有用感の高度化に努めた。

社会のより良き形成者となるには、自己有用感を高めておくことが効果的であることは論を待たないが、先行研究を調べてみても、ルーブリックを用いた研究は特定教科等に限定されたかたちで採用されたものしか存在しておらず、全校規模で取り組んだものは見当たらなかった。生徒の自己有用感を高度化させるには、全校的な取組が必須であり、それによってこそ生徒の主体性が育まれる（加えて後述するように、全教員が関わるなかで、教員自身も有用感を高めることができる）と考え、全校体制下での実践研究に挑戦した。

1. 研究の目的と意義

全校レベルで自己有用感を高度化させようとした本研究で、筆者は特に次の3点に取り組んだ。すなわち、①教員組織を「学習する組織」に向かわせること、②生徒と教員が一体となって学校経営に参画するよう促すこと、③「マネジメント思考型ルーブリック」を活用し自己有用感を高度化させる過程において活用方法の高度化を図ること、である。そもそも自己有用感とは、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れることで生まれる自己に対する肯定的な評価のことをいい、他者や社会の中で自分は価値ある存在であるという存在感、他者や集団に対して自分が役に立つ行動をしているという貢献、他者や集団から自分の行動や存在が認められているという承認がその構成要素として捉えられている（2020、末吉）。

自己有用感が高い児童生徒の行動上の特徴については、自尊感情が高く自信がある、他者に対して思いやりある行動ができる、他者と協同できる、学習への意欲が高く自主的・自律的な生活ができていると報告されている（栃木県総合教育センター、2013）。また、自己有用感の高まりによって、一人ひとりの児童生徒が他者や集団に貢献し承認される機会が増え自分の存在を実感することで、さらに自己有用感が高まり、学級全体のために自ら行動する姿が多く見られたという（福岡市教育センター、2018）。自己有用感の高まりは、肯定的な行動と関係があることがわかる。

右田中学校は、平成30年度から学校教育目標を「ふるさと右田を愛し、自ら考え課題に立ち向かう心身ともに健康で心豊かな生徒の育成」としている。

*1 防府市教育委員会学校教育課（平成31年度入学 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻学校経営コース）

令和2年度の「教育全体構想」では、教育活動全般において『チーム右田中学生・教員・地域』が意識された。そして、生徒の主体性を育てることが学校教育目標達成のために欠かせないとされ、同年度の生徒会スローガンは「飛翔～さらなる高みへ～」に決まった。教育全体構想の中に生徒会を位置づけ、生徒が学校経営に参画することが目指された。

次に、学校教育目標と生徒指導の関わりについて述べておく。生徒指導の充実、生徒の主体性を育むうえでも関連性が高い事項である。平成31年度から、生徒指導の充実のために、自分で決めて実行する（自己決定）、自分が価値ある存在だと実感する（自己存在感）、相互に人間として尊重し合う（共感的人間関係）ことを、教員全員が共有して指導にあたっている。それまで運動会や文化祭、学年行事では実行委員会を設けて生徒を募集し、それら実行委員となった生徒が主体的に運営に関わる機会があったが、全生徒を対象として主体性を育てるために具体的な方策が練られたことはなかった。

「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編」において生徒会活動の目標は「異年齢の生徒同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを旨とする」とある。学校教育目標の「自ら考え課題に立ち向かう」との関連性を踏まえても生徒会活動は学校教育目標の達成に向けて重要な意味をもつ。加えて、令和2年度の重点取組事項に「伝え合う力の育む日々の授業改善～生徒の思いや考えが通い合う場の設定を通して～」というのがあるように、授業改善は喫緊の課題として認識されていた。平成29年改訂学習指導要領でも「主体的・対話的で深い学び」への転換は重要視されているところであるが、それは右田中学校でも同様である。そこで令和2年度は、生徒が思いや考えを通わせる場を設定することが授業改善の柱とされた。生徒が思いや考えを表出する場面でどのような態度や発言を目標にするのかを具現化する必要があった。

2. マネジメント思考型ルーブリックの特徴

そこで着目したのがルーブリックである。ルーブリックとは、成功の度合いを示す数値的な尺度（scale）とそれぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を示した記述（descriptor）からなる評価基準表である（田中、2003）。学習者にルーブリックを提示したことで学習への動機づけが高まったという報告もある。例えば、鈴木（2011）によると、ルーブリックを提示した学生においては、内発的動機づけが高まったことが報告されている。

ルーブリックの効用は教員にも及ぶ。松下（2007）によれば、ルーブリックを用いることで、子どもの思考プロセスや表現の特徴が読み取れるようになっていき、教員にも「教育的鑑識眼」が培われる。さらに、複数教員でルーブリックを作成・共有することで同僚性が高まることも期待できるという。

このようなルーブリックであるが、冒頭ふれたように、先行研究はいずれも特定教科等に限ってそれを導入したものでしかなかった。筆者は、教員及び生徒がともに自己有用感を高めるためのツールとして「マネジメント思考型ルーブリック」を考案し、自己有用感を醸成しながら教員も生徒も自らマネジメント思考を獲得していくことに取り組んだ。教員組織が生徒と一体となってよりよいものを目指すという思考を獲得すること、生徒会活動において教員が生徒を主体的に運営に参画させる仕組みづくりに貢献すること、校内の全クラスで生徒の思いや考えが通い合う場の設定を促進させることの3点を目指した。

右田中学校における具体的な導入経緯および導入事例について述べていきたい。筆者は、右田中学校において従来から行われていた新聞を活用した学習活動に「マネジメント思考型ルーブリック」を導入した。同中学校では数年前から国語科の学習から発展した「はりきり新聞」という新聞スピーチを全校的に行っていた。しかし、その目的が教員、生徒に理解されないまま、新聞記事を選んで紹介するという活動だけが全校的に残存していた。生徒にとっては、年に数回、ただ担当回をこなすだけのものになっていたのである。このような状況を打破するために筆者が導入したのが「はりきり新聞」ルーブリックという、マネジメント思考型ルーブリックである（表1）。

このルーブリックを用いつつ、学年ごとに設けられた廊下の掲示スペースを活用した。令和2年度の2学年の生徒の作品を回収し、テーマごとに分け、1枚の掲示板が新聞になっているように生徒の作品を貼っていった。掲示板にはクイズコーナーも設けた。立ち止まってクイズに挑戦する生徒も出てきた。

表1 新聞スピーチに導入した「マネジメント思考型ルーブリック」

	内容 (こだわり)	つながり	ひろがり
4	型通りではなく、伝える内容や、伝え方に工夫をしている。	班で貼り切り新聞の準備状況を確認するようになる。	学年や他学年の人が書いた新聞記事に目を向ける。
3	伝えたい内容がある。	スピーチの練習を互いに聞き合う。	スピーチ前にもあたたかい拍手がある。
2	2社の新聞を比べて記事を選ぶ。	発表者どうし(週番)で、書いた記事を読み合う。	スピーチの用紙に、読んだことを知らせるシールを貼ったり、付箋にメッセージを書いたりして貼る。
1	伝え方、書き方に論理性が見える。(型を参照)	当番などのペアで一緒に準備をする。	スピーチ後に、質問やコメントのやりとりがある。

3. 教員のマネジメント力の発揮

新聞スピーチに「マネジメント思考型ルーブリック」を活用したことで、教員のマネジメント力も向上していった。ある教員は生徒を3～4人の班に編成し、互いに作成した「はりきり新聞」の記事とコメントを読んでいくように促した。その後、他の班のメンバーはそれに対して付箋紙にコメントを書き、貼っていった。これを全員に見えるように掲示するとともに、別のクラスメイトの用紙も見られるように掲示をした。活動後の生徒の感想には、共感すること、共感を得ること、意見の違いに関する内容に対して肯定的なイメージをもっていた。次回の活動に期待したいという意見もあった。

学年部も組織的なものになった。令和2年度の1年部は、「はりきり新聞」をスタートさせるにあたり、「『はりきり新聞』学活」というものを実施した。ルーブリックをもとに、「こだわり」「つながり」「ひろがり」を大切に活動にすること、活動の手順について共有がなされた。これまではクラスによって取組に差があったが、ルーブリックを導入したことで水準を保ちながら活動を推進することができた。

1年部が実施したように、じっくりと記事を読み選ぶ時間を与えられたことで、生徒は記事を注意深く読んでいった。生徒は興味関心のある記事を選び、同じ班の仲間と準備をすることは、大切にしたい活動の一つでもあった。教員は、生徒に「こだわり」を発揮させるために準備時間を設けたのであるが、それは「つながり」を深めることにも繋がった。

それまでの「はりきり新聞」は、生徒が一人で準備をし、一人で発表し、その発表用紙が掲示されるといういわば「点」の活動でしかなかった。それが、仲間同士の関わりによって「点」が「線」になった。教員のマネジメントも、学校全体で目指す資質・能力を確認し、方法を共有することで、個の教員の工夫が全体に広がり、「はりきり新聞」そのものが活性化していった。

右田中学校では、生徒の「伝える力」が問題視されていた。平成30年度末に実施された教員を対象とした学校評価に関するアンケートにおいても、発表に消極的な生徒がいる、発表の際に声が小さい、班活動において意見が深まらないことなどが指摘されていた。しかし、教員と生徒が協働して具体的な手立てを講じてはなかった。

平成31年12月に、新生徒会役員のためのリーダー研修会において、筆者と生徒会執行部20名は「話し合いルーブリック」を作成した。その手順は、事前に「話し合いで大切にしていること」についてアンケート調査を実施したうえで、生徒の意見を分類し、分類した結果をもとにルーブリックを作成するというものであった。生徒の意見を分類してみると、生徒は「共有すること」「意見交換」「聴き方」「雰囲気づくり」「話し方」「マネジメント」「自分の意見をもつ」を大切にしていることがわかった。これをさらにまとめると、「聴き方」「雰囲気」「司会」に集約できた。この3点を観点としてルーブリックを作成することとした。表2が、生徒の意見をもとに作成したルーブリックである。

1から4へと段階が上がっていくにつれ、他者に対する貢献度合いが増すような仕組みにしてある。「雰囲気」では、「1」の「机がびったりくっついている」は、班のメンバーが最低限行うものとして記述した。また、「2」には現状できていることを書いた。右田中学校では「全員が発言する」ことは、ほとんどできていた。他の「聴き方」「司会」についても、「2」は、現在生徒ができていることを書いた。「3」の「一言コメントを付け加える」ができるようになると、他のメンバーからの発言が促され、話し合いが活性化することが期待される。さらに、「4」の「時間内に発表者を決定している」という段階になる

と、班活動の次に起こり得るクラス全体に対して班の意見を発表するという段階への準備ができていくことになる。このように、このルーブリックは、単に「雰囲気」をよくしていくということにとどまらず、他者への貢献という要素を含んだルーブリックの構成になっている。

表2 話し合い活動に導入した「マネジメント思考型ルーブリック」

	聴き方	雰囲気	司会
4	自分の意見と比べながら聴く。	時間内に発表者を決定している。	発言をまとめる（分ける）。
3	うなずく・反応する。	一言コメントを付け加える。	全員を指名する。
2	体を向け、顔を見ながら聴く。	全員が発言する。	時間と目的を伝える。
1	黙って聴く。	机がぴったりくっついている。	事前に課題を伝えておく。

この「マネジメント思考型ルーブリック」は、全クラスで活用してもらえることになったが、なぜそれが実現できたのか、その過程を説明しておきたい。右田中学校は、平成31年度から2年間、研究指定を受け、「伝え合う力を育む」ことを主題として道徳の授業の充実と評価の工夫に取り組んできた。初年度は「生徒の思いや考えを生かす授業を目指して」、次年度は「生徒の思いや考えが通い合う場の設定を通して」という副題をつけ、道徳の授業づくりを起点とした生徒の主体的な学習活動を促進する工夫を他の学習活動でも生かし、日々の授業を活性化することを目指してきた。このような研究を進めるうえで、話型やファシリテーションの工夫、意見表出のための環境づくりに取り組み、どの教科の授業にも活用できる学習ツールが求められていた。そこに提案したのが、話し合いにおける「マネジメント思考型ルーブリック」であった。

先に述べたように、「マネジメント思考型ルーブリック」はまず新聞スピーチに導入したわけだが、その活用を促進させるため、令和2年2月の校内研修では、「マネジメント思考型ルーブリック」の利活用に関する説明等を行った。研修会後の教員の感想には、「全校で使っていくことができると有効である」「自分たちが目指す方向性がわかりやすい」という感想が示された。組織全体で活用していく有用性を確認できた。その後も、職員会議等でルーブリックの導入、利活用に関する研修を重ねた。加えて、ミドル・リーダーとしての役割を担っている教員が積極的にルーブリックを活用してくれたことで、校内への拡がりも加速した。

話し合い活動にルーブリックを導入したことで、全教員と生徒が共に目指す姿を共有できた。それまでは、生徒の主体性を育むことは職員会や地域協育ネット合同研修会等で問題視されていたのだが、具体的な方法や段階的な成長過程については話し合われていなかった。「話し合いルーブリック」は、話し合いの目的や段階的な高まりを示すものである。どの教員がどの授業で話し合い活動を実施しても共通のツール、教科や学年の枠を超えたツールとなる。教員が他の教員の授業を参観する際の視点にもなる。結果的に校内研修の活性化にもつながった。

ルーブリックを活用する過程で教員同士の学び合いも深まっていった。教員が右田中学校独自の「話型」を創出し、話形とルーブリックをもとにした授業実践がなされた。話型を創出する際に、研修部教員で話し合い原案を作成したこと、原案をもとに学年部ごとに生徒の実態にあった話型を作成したことは、生徒の実情や教員の支援について見直すチャンスとなった。ルーブリックをいつも手元に置くことで生徒自身のマネジメント思考も促進された。より上位の目標を意識しながら学習活動を行おうとする意識も高まった。ただし、話し合いのその場でしかルーブリックを確認しないというケースもあった。

4. 生徒会活動における活用

生徒会活動において「マネジメント思考型ルーブリック」を用いたのは、日常生活で生徒全員にマネジメント思考を獲得させるためであった。生徒は自分たちで学校生活改善のためのPDCAサイクルを回すように意識していった。

令和2年度右田中学校生徒会スローガンは「飛翔～さらなる高みへ～」であった。さらに高いレベルを目指すという思いは、ルーブリックによって到達レベルを上げようとすることに通じるものである。生徒会

は、生徒会の手による「右田中学校ルーブリック」を作成し活用することにした。企画委員会での協議、筆者および担当教員との協議、生徒会執行部と担当教員との協議を経て、全校生徒が生徒会組織の6つの委員会の行動目標についてルーブリックを作成した。委員会ごとに作成されたルーブリックのテーマは、総務委員会：授業前後のあいさつ、生活委員会：あいさつ、学習委員会：授業態度、広報委員会：朝読書の取りかかり、厚生委員会：掃除の仕方、保健委員会：給食時間の態度であった。

作成や活用の過程で、筆者はアドバイザーとして貢献した。ツールを活用するにあたり、構造を理解することは大変重要である。特に生徒会長には、ルーブリックの段階が高まるにつれて他者への貢献が盛り込まれることを意識して作成するようアドバイスした。5段階のルーブリックの各段階は、「0：もっとがんばろう」「1：現状」「2：個人で達成！（自分のこと）」「3：みんなで達成（周りの人にいいこと）」「4：飛翔」であった。さまざまな生徒がこのルーブリックに位置できるよう、あえて「0」も設けられていること、自分のことだけでなく学校の皆のためという目的を大切にすることを確認した。

令和2年7月、各学級で生徒総会が実施された。例年であれば全校生徒が体育館に集まって生徒総会を実施するわけだが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大への対策として、各学級で「学級での話し合い」が実施されることになった。生徒は、各学級に存在する6つの生活班（委員会に関する仕事を担っている班）ごとに、それぞれのテーマに合わせてルーブリックを作成した。

各学級で作成されたルーブリックは、生徒会執行部を中心に検討され、6つの委員会ごとのルーブリックをひとつにまとめた「右田中学校ルーブリック」が完成した。完成したルーブリックは、全校生徒及び教員によって廊下や教室に掲示された。皆がルーブリックを見ながら、そして意識しながら学校生活を送った。ルーブリックの形式を踏まえた全校生徒対象の自己評価アンケートも実施した。これはルーブリックの0～4の段階を点数として自己評価していくものである。点数化された結果をもとに、課題を洗い出し次なる目標を立てることができた。これをもとに、教員が委員会活動を支援する動きが生まれた。生徒会活動を通して、生徒自ら学校生活改善のためのマネジメントサイクルを確立した。

生徒会執行部は自己評価アンケートを集計した。クラスごと、委員会ごとに点数を表にして全校集会で分析結果を発表した。全校集会が終わると、学級ごとに自分たちの現状に合わせて次の目標を考えるということがなされた。ルーブリックを活用したことで、生徒も教員も自分たちの学校生活に内在する課題を可視化し、さらなる高みに向かって目標を立て行動することができた。

自己有用感を高度化させるには、存在感、貢献、承認が必要だが、この3要素を生徒に感じさせることを目指した。日々の生活の中で、生徒が教員から認められるチャンスはないことはないのだが、それを自覚できている生徒は少数であった。そこで、令和2年度10月に開催された学校運営協議会を活用した。

生徒が「右田中学校ルーブリック」を活用して学校生活の課題を見つけ解決している生徒会活動の様子を動画にした。学校運営協議会および小学生による中学校見学会を動画で協議会の委員に紹介したのである。動画の内容は次のとおりである。

- (1) 生徒会長あいさつ
- (2) 生徒会スローガン「飛翔 ～さらなる高みへ～」
- (3) 生徒会組織の概要
- (4) 1年間の各委員会の目標
- (5) 「右田中学校ルーブリック」の概要
- (6) 委員会ごとの活動
- (7) 生徒会副会長あいさつ

この動画には、生徒会執行部20名全員が出演した。(1)～(7)のすべてを生徒が担当し、原稿を作成した。計14分の動画を作成するにあたり、筆者は文の長さや内容を確認する程度のはしたが、生徒自身の言葉が生かされるよう配慮した。当初は生徒自身が学校運営協議会の場でビデオの説明自体を行うことも検討していたのだが、授業時間と重なったため断念し、ビデオを筆者が流すこととした。11月には、小学6年生が来校した「中学校見学会」でも、この動画を流して生徒会を紹介した。学校運営協議会、中学校見学会のいずれにおいても、動画を見た感想を聞くことができた。その一部を載せておく。

○学校運営協議会委員の感想

- ・「最近、こちらもちろんあいさつをしているが、子どものほうからあいさつをしてくれることが増

えてきた。」

- ・「この執行部の生徒たちに、いろんなことを任せて先生たちと一緒に行事もつくっていったらいい」
- ・「生徒会の動きがよくなっていることを評価してあげてほしい」
- ・「生徒の自治活動に感動した。映像でまとめたものを見ると、さらにいい。企画、運営、発信することができていて、ぜひ小学生にも見せたい。」

○中学校見学会における小学6年生の感想の抜粋

- ・「みんなしゃきっとしていて『とてもあこがれるせんぱいだなー』と思いました。」
- ・「先生たちがかんがえるんじゃなくて自分たちでかんがえていてすごいと思いました。」
- ・「中学生は、生徒たちで自分の学校をつくっていくってすごいなと思いました。」
- ・「体育館にあった『さらなる高みへ』を見てカッコいいと思いました。全校で協力して作った看板のようなものはすごく上手だったから私たちも作ってみたいと思いました。右田中は、主に生徒が学校をよりよい学校にしているということが説明を聞いてよくわかりました。そういうところが中学生のカッコいいところだと思いました。（後略）」
- ・「アンケートをとってそれをまとめていたり、目標を立てていたり、生徒だけでいろいろなことをして、生徒会のやっていることは全校の生徒のためになるし、大人になっても役立ちそうだと思います」
- ・「ぼくが生徒会でいいなと思った取組は「表」（注：ループリックのこと）です。表では、それぞれの委員会が決めた目標の達成できたところを確認できる、アレです。確かに、アレが廊下などにあったら、毎日確認できるし、この取組は玉祖小で使ってもいいんじゃないかと思いました。ぼくが中学生になったら、どの委員会に入るかわからないけれど、その入った委員会で学校を過ごしやすい、より良い学校にしていきたいです。」

上記感想を生徒会執行部に提示した。すると、「認められて嬉しい」「認められていると実感した」「評価されていて」という反応が返ってきた。自己有用感を高度化させる要素である「承認」について記述している生徒が多かった。適切な評価を与えることは、さらに生徒に「やりがい」を感じさせ、今後も「どんどん続けていきたい」とさらに高めていきたいという気持ちを醸成させることにつながっていた。

令和2年度11月の生徒会月間目標は「ループリックを達成させよう」に決まった。生徒会執行部は、毎月このような目標を立て、昇降口に掲示している。生徒たちは、なぜループリックを達成したくなったのであろうか。生徒会執行部に質問した。

- ・「周りの先生のサポートのおかげです。」
- ・「より良い学校を作るため。スローガンを達成させるため。」
- ・「5段階がだんだん上がっていくのが目に見えて嬉しいので、もっとあげたいと思うから。」
- ・「目標が明確であり、達成したいと思しやすいような目標だったので、そう思いました。」
- ・「みんながループリックを達成して「5」にたどり着いた時の右田中学校がどのような学校か考えてみたときに、すごく素晴らしい学校だと感じたので、達成したくなりました。ループリックを達成した時の学校は、誰でも同じように仲良く、授業に活気があり、リーダーシップのある人がたくさんいる学校です。」
- ・「全校の力で右田中学校が変わっていくのが楽しかったからです。初めの頃は「2」「3」と現状以下の人たちが多かったのが、自分で確認することによって「3」「4」など現状以上にできるよう生徒一人ひとりが心がけていき、ループリックにそって良い右田中をみんなで作り上げていくのが楽しかったからです。」
- ・「学校をよりよくしていくため。今の状況を「見える化」することにより、多くの人が最高点の「4」やそれ以上の行動を目指して頑張ることで学校全体が活気付き、学校が楽しくなると考えられるから。」

生徒会執行部は、自己有用感を高めるための「マネジメント思考型ループリック」を活用することで、「存在感」「貢献」「承認」に加えて、「可視化すること」「行動すること」「目標をはっきりとさせること」「教員の支援」によって、ループリックを達成させることへのモチベーションを高めていた。

一般に、自分自身を肯定的に評価することは容易なことではない。古荘（2020）は、年齢が上がるほど、自己肯定感の下がると述べている。自己肯定感が下がっていくと、ささいなことで傷つき立ち直れない、夢

や希望をもてない。上記生徒会執行部のように、自己を肯定的に捉えるためにも他者からの評価は欠かせない。しかし、ルーブリックを用いることで、児童生徒の成長が型（枠）の中でとどまってしまうのではないか、道筋が決められており窮屈に感じられるといった課題も挙げられている（河合、2003）。そのため、児童生徒の成長が型（枠）の中にとどまらないものであるということを明らかにし、資質・能力の伸長と広がりを樹形図に見立てて高度化しようと開発したのが「ルーブリック・ツリー」（図1）である。

「あいさつ」を例にあげると、「あいさつ」に高まりが見られる生徒は、「あいさつ」から「会話」へと樹形図のように発展させていた。生徒会執行部20名の生徒に「あいさつが高まると、他にどんなことが生まれる？」と尋ねたところ、「信頼関係」「コミュニケーション」「礼儀」などがまるで樹形図のようにその先に存在していることに生徒は気づき、それを可視化させることができた。

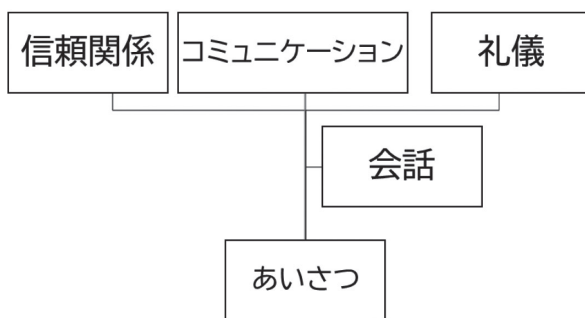


図1 ルーブリック・ツリーの例

5. 本研究の成果と課題

「マネジメント思考型ルーブリック」を活用し自己有用感を高度化させるよう努めた本研究の成果について述べておきたい。

第1は、「マネジメント思考型ルーブリック」の導入によって、学校全体を「学習する組織」へと向かわせたことである。令和元年度より研修部を中心に「マネジメント思考型ルーブリック」の活用を推進してきたが、それが学年部へと広がり、生徒会活動へも導入するに至った。教員も生徒もルーブリックを作成するにあたり、自分自身と組織の現状を確認し次の段階へ向かうためには何をしたら良いかを思考し課題解決に向けて取り組んだ。学校全体で共有するツールとして導入した「マネジメント思考型ルーブリック」は、教員の個の学びを促進させるものでもあった。

学級目標を達成するために「話し合いルーブリック」を修正し、あらたなルーブリックを創出した教員がいた。学級に所属する生徒全員をルーブリック作成に参画させた。この取組は、生徒を学級運営する当事者とするにつながっている。生徒達は、このルーブリックをもとに反省点と改善点を見つけ次の日の目標を立て学級で共有し学校生活を送っていた。「はりきり新聞」によって生徒同士のつながりをマネジメントした教員もいた。生徒同士のつながりを促進させるため、少人数で編成される班を利用し、互いに紹介文を書いて読み、それに対するメッセージを交換させていた。そして、全生徒の作品が見えるように掲示するように方法を改善した。

第2は、生徒が自己有用感を高める過程において、学校改善に主体的に参画したことである。自己有用感を高めることと同時に学校生活の改善に主体的に向かう生徒の変容が見られた。生徒の主体性を育むことは学校教育目標達成に向けた課題でもあった。しかし、「マネジメント思考型ルーブリック」を活用して生徒自身がPDCAサイクルを展開したことが、その解決につながった。

生徒が運営する委員会活動では「あいさつ運動」において新たなチャレンジが始まった。平成31年度まで「あいさつ運動」は、生活委員会に所属する一部の生徒が参加しているだけであった。しかし、「右田中学校ルーブリック」を活用してあいさつのレベルを上げていく過程で、生徒全員が参加する取組に発展したことである。部活動ごとに担当日を決定し、全生徒が「あいさつ運動」の主体となるチャンスを得ることができた。

同時に、生徒の活動を積極的に支援する教員の姿があつたことは具体的な成果であった。ルーブリッ

クを活用することにより、生徒が活動そのものの質を向上させた。教員がその支援を行うことは、教員自身のマネジメント力向上につながるものであった。なぜそれが可能になったのか。それは、生徒とルーブリックを共有することにあった。右田中学校で活用したルーブリックは、すべて生徒と活用してきたものである。特に、生徒会活動で導入した「右田中学校ルーブリック」は、生徒全員の手によって作成されたものである。生徒と教員がめざす姿を共有することは、生徒を次の段階に成長させるためのマネジメントを意識した教員の営みを促すものでもあった。この実践は、学習指導においてもその汎用性を大いに期待できるものである。

第3は、ルーブリックそのものを高度化させた「ルーブリック・ツリー」を用いて思考様式を提案できたことである。本提案は、「さらなる高み」を目指す思考様式である。この思考様式は、生徒ばかりでなく生徒を支援する教員にこそ求められるものである。教員として組織の中で互いの自己有用感を高めながら資質・能力を高めていくことで、その後のキャリアステージにおける活躍は大いに変化することが予測される。本提案については、山口県教員育成指標を活用しつつ人材育成を行う際にも有益であると考えている。

平成31年度より、研修部の活動を切り口にして「マネジメント思考型ルーブリック」を活用、応用してきた。授業において「話し合いルーブリック」を活用したことは、全教員が少人数での話し合い活動における到達目標を可視化できる。教科の専門性や学年という枠組みは組織にとって障壁となる場合もあるが、全校で同じツールをもつことは、その障壁を低くし、授業におけるスタンダードとなり得た。誰が授業をしても一定の質を保ちながら話し合い活動が行われるという質の維持にも貢献できるツールであった。

しかし、さらに汎用させるためには教員の組織的な学習も必要である。令和2年12月、研修部教員と課題について協議を行なった。その際、課題として3点が挙げられた。

1点目は、ルーブリックの活用を継続していくことにある。特に「右田中学校ルーブリック」を作成したものの、教員の支援に差があったことも事実である。協議の中で、もっと（教員に）できることがあったのではないかという意見も出た。これまで「はりきり新聞ルーブリック」や「話し合いルーブリック」を学級経営や学年経営において応用した教員もいたが、好事例を共有していくことの他に組織全体をもう一步「学習する組織」へと向かわせる次なる一手は何だったかを検証する必要がある。

2点目の課題は、教科教育において今後取り組むべき課題である。まず、教科教育においてルーブリックの活用を促すことである。令和3年度より新学習指導要領が完全実施となる。生徒のパフォーマンスによって評価する「知識・技能」「生徒の思考・判断・表現」「主体的に学習に向かう態度」の評価方法について授業者が明確にすべき課題である。教科の指導においても、本実践研究で活用した「マネジメント思考型ルーブリック」の利点である組織的に活用できるツールであること、ルーブリックそのものが有する複数の教員によって活用できることが生かされることになろう。なぜなら、教員が生徒に身に付けさせるべき資質・能力を明確にした上で評価基準や規準を設定するために大変有効なツールである。右田中学校においても、令和2年度末に令和3年度からの授業改善や評価方法について準備が進められていた。この過程において、ルーブリックの作成方法や活用方法を共有することは、生徒と教師が一体的に成長できるツール、より信頼性の高い評価を実現することにつながるはずである。

3点目は、個々の教員が学校経営とのつながりを意識して教育活動を行うことの重要性である。目的をはっきりさせた上で活動を行うことに加えて、学校教育目標、さらに社会とのつながりを意識した教育活動にする必要があることも協議の話題となった。求めたい生徒像を全教員で共有することの重要性も確認できた。毎年4月に実施される職員会議では、校長自ら学校経営ビジョンを私たち教員に伝える場があるが、私たちは常にそれを意識しておくことが求められていることも再確認でき、「マネジメント思考型ルーブリック」活用における課題を検証することで、その根幹を捉え直すことができた。

おわりに

本論文では、防府市立右田中学校での個別的な実践を近隣他校でも実現可能なものとなるよう「マネジメント思考型ルーブリック」を用いて自己有用感高度化推進の過程を記してきた。ルーブリックを活用して生徒が主体的に自らを成長させることができたことは、生徒自身がさらに伸びようという気持ちを高めさせることにつながった。

今後は、防府市内の小中学校においてもルーブリックを導入できるよう働きかけていきたい。令和3年2月には防府市立桑山中学校の校内研修において、「マネジメント思考型ルーブリック」を活用した学校運営

及び学習における指導と評価の一体化について講話をさせていただいた。桑山中学校のチャレンジ目標である、「あいさつ 掃除 授業 夢中」という、あいさつと掃除と授業に夢中になっているとはどういう姿なのかを共有するとともに、教員で段階的な高まりを求めてルーブリックを作成していった。他校においても成果の還元に努めていきたい。

私たち教員にとって長い教職人生をどう歩んでいくかは皆が立ち向かうべき課題でもある。これまで周囲の皆さまに育てていただいたように、今後は筆者自身が様々な人の人材育成に携わり山口県教育の発展に貢献していきたい。

付記

本論文の内容は、中原育代が執筆した山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻の実践研究報告書に加筆・修正を加えたものである。もうひとりの筆者、佐々木司は中原育代の指導教員として適宜アドバイスを与えるとともに、本論文執筆に際しては全体の統括および部分的な修正の指示等を行った。本論文における「筆者」という記述は、特に断りがない限り、中原育代を指している。

参考文献

- 河合久：「客観的な評価をめざすルーブリックの研究開発」、『平成13・14年度科学研究費補助金（基礎研究C）研究成果報告書』，2003.
- 末吉雄二：『自己肯定感・有用感を高めるカリキュラム・マネジメント 「社会に開かれた教育課程」の視点から』学事出版，2020.
- 鈴木雅之：「ルーブリックの提示による評価基準・評価目的の教示が学習者に及ぼす影響—テスト観・動機づけ・学習方略に着目して」，教育心理学研究59巻2号，2011.
- センゲ、ピーター・M：『学習する組織』英治出版，2011.
- 栃木県総合教育センター：「高めよう！自己有用感 ～栃木の子供の現状と指導の在り方～」，2013.
(http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h24_jikoyuyokan/：2021年7月20日確認)
- 中原育代：マネジメント思考型ルーブリックを用いた自己有用感高度化計画の推進，「令和2年度山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻実践研究報告書」，2021.
- 福岡市教育センター（人権教育研究室）「児童生徒の自己有用感を高める指導の在り方—互いのよさを認め合う活動を通して—」，2018（http://www.fuku-c.ed.jp/center/report/tyousa/h30/H30_g_jinken.pdf：2021年7月20日確認）
- 古荘純一：『空気を読みすぎる子どもたち』講談社，2020.
- 松下佳代：『パフォーマンス評価 —子どもの思考と表現を評価する—』日本標準ブックレット，2007.